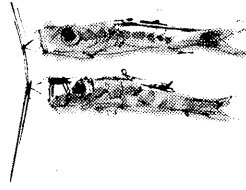


子どもの文化（その二）

— 児童文化にかかわる子どもの役割 —



◆子どもは自分たちの文化財を作り出している

子どもは、現在、さまざまな文化財を子どものために生産し、それを子どもの世界に送り込もうとしている。児童文化財とよばれるものの大部分は、このような状態で存在する。

しかし、児童文化財は、本来は子どもを作り手とするものではなかったか。あるいは、少なくともその形成の過程で、子どもが重要な役割を果たす場合が多かったのではないか。

前回にみてきたように、伝承的なあそびやそれにつけられたわらべうたは、子どもの群れが作り手であったし、伝承説話が童話化されていく過程で、その伝承と変容に携わるのも子どもであった。

本 田 和 子

さらに考えれば、玩具や遊具などの、子どもの遊びに使われるものの一切は、そもそもは、子ども自らの工夫と創造にかかわるものであった。

たとえば、子どもの周囲から、次のような遊びの場面が観察されている。

——数名の男児が、工事用の砂の置き場を通りすぎようとした。ふと立ちどまって砂の盛り上がりを見つめる。周囲にはおとなの影がない。子どもたちはしゃがみ込んで砂の山を作りはじめた。山がだんだん大きくなっていく。一人の子どもが立ち上がって、周囲を見回し、そばに落ちていた平たい木片とブリキ板を拾ってくる。「よしっ」とほかの子どもがそれを受けとる。二人でつみ上げた砂の山をビタビタとたたきはじめた。

山が大きくなってしつかりしてくる。「トンネル、掘ろうか」
「大きなトンネルだぞ」周囲から手が差し込まれた。グサツと砂山がくずれる。子どもたちは顔を見合わせる。もう一度、砂山が固められ始める。何回か試み、何回か失敗したあげくに、一人の子どもが、ふとそばにころがっていた排水用の土管の上にとまった。子どもの顔が輝く。間もなく子どもたちは、大きな砂山の中に埋め込まれた土管の両はじに腹ばいになり、お互いへのぞき合い、声をかけ合って笑い興じていた。――

この子どもたちにとって、工事用の砂は何のためらいもなく遊びの材料であり、木片もブリキ板も、もちろん玩具である。そして、何よりも子どもにとってすばらしく思えたのは、排水用土管の発見であった。こんな面白い玩具がころがっているのに、どうして遊びがやめられよう。顔もからだも、砂まみれになって遊び続ける子どもたちの姿に、自分たちの世界を自分たちで切り開いた喜びがあふれている。

子どもたちの世界では、もう砂も木片も土管も、本来の意義を失って、完全に遊ぶためのものに化し、遊具としての象徴的な意味において存在している。木片やブリキ板は「砂たたき玩具」なのであり、土管は「大きなトンネル」であり「のぞき穴」なのである。

子どもたちが、このように、周囲のものを、自分たちの意味づ

けのもとに、自分たちの世界にとり込んでいく姿は、子どもの周囲からいくらでも発見することができる。そしてこれは、昔も今も変わらぬ子ども本来の姿といってよいのではないか。

子どもの遊びは、歴史を貫いて変わらないものなのか、あるいは時代を反映して移りゆくものであろうか。

一時代前の子どもがよく遊んだ「戦争ごっこ」が影を潜めて、最近の子どもは「怪獣ごっこ」に熱中する。羽根つきや石けりにかわって、サッカー遊びやバレーボールが流行する、というのは、時代と共に変わるものとして、とらえられる面である。

しかし、これらの遊びも、「足で蹴る」「落ちてくるものを打ち上げる」など、発達してきたからだの機能を使って遊ぶこと、あるいは「戦場」とか「怪獣との出会い」など、子どもの現実には起こり得ない場面を想定し、「つもりになって遊ぶ」状態というとらえ方をすれば、本質的には同じである。

子どもの遊びには周囲の現実が反映されるが、変わっている部分は、その反映される現実なのであって、反映する側の機能ではない。まして、遊びの構造そのものは、ほとんど変わっていないのである。

次の例は、歴史や時代をこえて遊ぶ子どもの姿を、あざやかに示してくれる。

――いつしか雛おしすえて、そそき居給へり。三尺の御厨子一

具に、品々しつらひすえて、又小さき屋とも作り集めて奉り給へるを、所狭きまで遊び広げたまへり。紫「雛やらふとして、犬君がこれを毀ち侍りにければ繕ひ侍るぞ」とて、いと大事と思いたり。源「実にいと心なき人のしわざにも侍るかな。今つくろはせ侍らむ。今日は言思して、な泣い給ひそ」とて、出で給ふ気色、いと所狭きを、人々端に出で見奉れば、姫君も立ち出でて見奉り給ひて、雛の中の源氏の君つくろひたてて、内裏に参らせなどし給ふ。——源氏物語「紅葉賀」より——

引用部分は、源氏物語の中の、幼い少女紫が、人形遊びに熱中している場面である。少女は、源氏から贈られた人形や小さな家を広げて余念なく遊び続ける。人形の一つを源氏の君に見たてて、その人形に参内をさせるなど、源氏の行爲を再現させて遊ぶのである。

これは、發達した象徴あそびの例として、現代の心理学者たちが引用する観察資料と、全く同一だといふことができる。人形の行爲が「内裏に参内する」というところに、この少女の生きていく時代と環境が反映されているが、構造的には全く変わらない遊びを、平安時代の少女も、現代の子どものも遊んでいるということである。

子どもの遊びとは、本来、そのようなものではないのか。そしてそれは、どのように遊ぶことが子どもの本質であることを、何

よりもよく物語っているのではないか。

したがって、現在、私どもの周囲に見られるさまざまな観察例、たとえば、遊びの過程で必要となれば、周囲にあるものを飽くことなく玩具として取り込んでいく姿を、古い時代にもあてはめて考えることができるであろう。

古い時代には、子どもたちは、子どものために生産された玩具を持っていなかった。しかし、子どもたちは遊んだであろうし、遊ぶ生活の中で必要なものを、周囲から見つけ出し、玩具として位置づけていった。投げるための石、よじのぼるための木、折るための枝など、すべて子どもによって意味を与えられた遊び道具であった。

古代の住居跡から出土する動物の粘土製品などは、はたして玩具だったのか呪術的対象なのか、不明であるとされる。しかし、それらの人形的なものが、子どもの手に触れうるような状況に置かれていたとすれば、必ずや、それを遊びの中に取り込んでいったであろう。美しく飾りつけられた雛壇から、雛人形用のお膳や食器、針箱などが持ち出され、子どものままごとに使われているのは珍しい例ではない。小さく巧みに作られた三人官女の持ちものなど、ぜひとも遊びの中で使ってみたい気持ちを、子どもの中にかきたてるものである。古い時代の子どもたちも、恐らくは同じような気持ちで、これらの土器をいつか玩具に変えていったの

ではないか。

わが国の場合、江戸時代には玩具問屋が発展して、盛大に商売が行なわれていたといわれる。したがって、この時代には、多種類の遊びと玩具が存在し、玩具の生産と流通がおとなの手にゆだねられていたものとみてよい。しかし、ここに至るまでの長い歴史の中で、玩具の管理者は遊ぶ子どもの群れであった。児童文化財は、子どもの支配下にあったのである。

児童文化財の生産と普及に、おとなの関心が寄せられ、子どもにとって必要なものが、より多量に、より広範囲にいきわたるようになったのは、確かに一つの進歩とみてよい。しかし、本来が子どもと共にあって、子どもの作り出すものであった文化財が、完全におとなの管理下に移され、子どもは与えられるものを受けとる存在になり変わっていると、現代の問題を感じさせられるのである。

◆子ども不在の児童文化

本来は、子どもが創造主でもあり、その発展のにない手でもあった児童文化財が、いつかおとなの手にゆだねられ、おとなの生産にかかわるものとなって以来、時が流れている。そして、その生産の形態が進めば進むほど、児童文化財は子どもから遠ざかり、「子ども不在」というおかしな現象すら生まれてきている。

たとえば、次のような乳児用玩具がある。プラスチック製の円筒の中に、三色の小さい球が入っていて、円筒の上からは、やはりプラスチックの花をつないだ花づなが周囲に垂れ下っている。その円筒は、ねじで旋回する自動車と組み合わされていて、その自動車の運転手はプラスチック製の可愛いおサルの人形である。ねじを巻くと「リンロンリンロン」と音楽を鳴らしながら、床の上を走り回り、円筒も回転する。円筒の回転と共に花づなが周囲に広がってくる回る回り、中の小球もころころが回る。つまり、乳児のベッドの上につるされた「メリー」とよばれる遊具と、ねじで動く自動車を組み合わせたものである。

ところで、一体、この玩具は、幾つぐらいの子どもを対象にしているのだろうか。天井からつるして眺める感覚遊具を楽しむ段階の乳児にとっては、くるくる回りながら走り回る自動車を、目で追い続けることは困難であって、すぐに視野から逃げ出してしまう。加えて、最前部にすわって運転しているおサルの人形など、何の関心ももてない存在である。

「おサルが可愛い」と感じられるのもっとあとの段階であるが、おサル車の運転手が嬉しかったり、自動旋回車が面白かったりする幼児にとっては、くるくる回る花づなつきの「メリー」の部分は邪魔であるし、自動車のイメージから遠すぎるであろう。

この玩具と本当にかかわりをもつ子どもはいないのではない

か。あれもこれもと欲ばったおとなが、結局は対象不明の玩具を作り上げてしまったのではないか。

これに類似したことは、児童文化の他の領域に関しても、数多く見いだすことができる。

たとえば、最近の少年週刊誌の読者層は大学生であるといわれる。確かに、店頭でそれらを求めているのは子どもではない。

「少年〇〇」と銘打たれたこれらの雑誌の中の連載漫画が、子どもよりもむしろ青年層にアピールしたということがきっかけとなって、編集者の姿勢は青年対象に傾き、現在では「少年〇〇」という誌名が完全に不適当なものになり変わっているものすら少なくない。価値評価は別として、とにかく子ども向けの雑誌であったものが、子どもを排除してしまっている例である。

また、事情は幾分異なるが、児童文学の場合にも、往々にしてみられるのがこの「子ども不在」の現象ではないか。

「赤い鳥」以来のわが国の児童文学が、「童心」というあいまいで抽象的なものを基盤としたために、現実社会の生きた子どもとの結びつきを欠いた、という批判は既に久し以前からなされている。特に、戦後の歩みは、日本の児童文学の「子ども不在」という特殊性やゆがみを否定し、それを克服しようとするところから出発している。児童文学を、何よりも「子ども自身のものに」というのがその主張の中心であった。

ところで、真に子どものものたり得るすぐれた作品が、その主張のはなばなしほどに数多く生まれてきているであろうか。確かに、一九六〇年代の創作活動は活発を極めている。しかし、あふれるほどに書店の棚を埋めつくしている書物の中から、子どもたちは「ムーミン」や「ピッピ」あるいは「ひとまねこぎる」や「エルマー」のように、肩を組んで歩きたくなるような友人を、そう多くは発見できないのではないか。

さまざまな現実の矛盾、現状への不安と懐疑、戦争の悲惨さと平和への祈りなど、作家たちは各々に熱い思いを作品に託して自己を表現し、読者対象に訴えようとする。この点で、わが国の作家たちは真剣であり、求道的ですらある。しかし、作家の主張や生きる姿勢そのものよりも、子どもと直接的にかかわりをもつのは、具体的な作品であり、作中に生きる主人公である。一つ一つの作品が真に子どもの心をとらえ、子どもがその世界にはいり込むことができ、それを自らのもの、自身の内側のものとしてとらえられないかぎり、作家の訴えは、あくまでも一人のおとなの自己表現にとどまっていて、子どもとの間に連帯は生じない。

このような立場で多くの作品を見返すと、意外に、子どもの心を十分にとらえた作品が少ないのではないか。というよりも、作品の中に、子どもの内的な世界が展開されていないのではないか、という事実が気づかされる。たとえば、次に引用するのは、

リンドグレーンの作品の一文である。

——ふたりはだまって立ったまま、冬の庭を眺めていました。星の光がごたごた荘の屋根を透らしています。あそこにビッピがいるのです。いつまでもビッピはあそこにいるでしょう。そうおもうと、ほんとにすてきでした。年は一年、一年たつていっても、ビッピとトミーとアンニカは、おとなになりますまい。それは、もちろん、生命の丸薬の力がぬけていなければの話ですが！
あたらしい春や夏が、あたらしい秋や冬がくるでしょうが、でも、あたらしいあそびがつづくでしょう。

——「ビッピ南の島へ」から——
——それにぼくは、この「はるかな国」では調子がよくて、背も高くなっています。毎日一回、ぼくのおとうさんの王さまは、台所のドアにしろしをつけてぼくがどれくらい大きくなったかをしらべます。

——すべてがうつくしいので、ぼくは目がくらみそうになり、まるでレモネードをたっぷりのんだような感じでした。足にはうれしさがみなぎって、とてもじつとしていられないし、手にも力があふれています。

——いずれも「ミオよ、わたしのミオ」より——
喜びが体中にあふれて、さわやかな思いにかられると、「レモネードをのんだよう」に感じ、父子の幸せな生活を「台所のドア

にしるしをつけて背丈ののびを喜び合う」と表現するような、そして、いつもいつも生命力にあふれ、手足を動かして遊び回る子どもの姿が、実にいきいきとよく描かれている。

こうした具体的で日常的な子どもの生活は、読者である子どもにとつてきわめて身近に感じられよう。否、身近だとか疎であるとか、感じる余地すらないほどに、子どもは作品に触れながら一つになつてしまふのではないか。作品と自分の距離すら意識することなく、無自覚のうちに、作品の世界にはいり込んでいくものと思われる。そしてこういう描き方が「子どもを内側から描く」ということであり、子どもが内側からとらえられた時、真にその作品の中に子どもが存在するといつてよいのではないか。

児童文化に携わるおとなたちは、余りにも訴えを多くもちすぎているため、伝えるということにせっかちでありすぎるように思われる。伝えるべきものを盛り込みすぎる余りに、子どもの生きる余地が作品の世界になくなってしまふのではないか。

子どもの文化は、おとなが子どもに訴えかけ、それを受けとらせていく媒体としてのみ存在するのではない。「子どもの文化は、子ども自らが作り手であった」という素朴な真実をあらためて想起すべき時が、今、きているのではないかと思うのである。

(大茶の水女子大学)